

タイトル	デッサンの達人になろう！～コンテと鉛筆によるリアリズム描写～					
学校名	千葉県立	千城台	高等学校	美術・工芸	氏名	秋山 宏基
教材費	約800円			実施時間数	10～14 時間	

### 1. ねらい

威勢のいいタイトルをつけたが、これだけで“デッサンの達人”になれるわけではもちろんない。デッサンの授業は優劣がつきやすく根気も必要なため、ここでつまずいてやる気をなくす生徒は少なくない。そこで、夢中になれて達成感や充実感を味わえる素描の授業ができないかと、少しだけ景気のいい名前にしてきた次第だ。

失敗のリスクを減らし少しでも興味を持たせるために、芸能人などの写真を使用し、形はトレースさせる。そして、授業のねらいを ①明暗を正確に描くことと ②細かいところまで描き込むことの2点に絞り「とにかく写真とそっくりにすること」を目標とした。ねらいを単純化した分、ほとんどの生徒がある程度のレベルで作品を完成できるよういくつかの工夫をしたが、強いて言えばそれがこのレポートの見どころかもしれない。

なお、この題材は現・県立若松高校の尾谷耕一先生の実践を元に手を加えたものである。

### 2. 材料

○ミュージズボード（B4、3ミリ厚）○コンテ（コンテ社製角形ブラック 2B）○コンテ鉛筆（コンテ社製ピエールノワール 2B）○鉛筆（2B）○練り消しゴム○スーパーチャコペーパー（グレー）○クリアホルダー（B4）○フィクサチーフ○“達人シート”○カッター 等

※デッサンの授業にしては割高だと思うので、高価なスーパーチャコペーパーは共同で使用。ミュージズボードも3mmではなく1mmにすればさらに安上がりになる。

### 3. 展開（時間）

#### 【準備・写真選び】

- ・明暗がはっきりした写真がやりやすい。ハーフトーンの多い写真は微妙な明暗に手こずることがある。また、黒っぽい写真の方がぐいぐい塗れるので気持ちがよい。
- ・顔のアップであること。（B4に拡大した時、本物の顔より大きくなることを条件にした）
- ・選んだ写真はB4サイズにモノクロコピーする（2枚用意）。

#### ① 写真のトレース〔1～2時間〕

- ・ミュージズボードにコピーした写真を貼る。一つの辺だけを貼りコピーがペラペラめくれるようにする。（もう1枚のコピーは⑥まで保管しておく）
- ・スーパーチャコペーパーを挟み上からなぞって写す。ある程度筆圧を加えないと写らないが、あまり強すぎても線が消えなくなり残ってしまうので注意。
- ・輪郭を写すというより、明暗の境目を写すようにする。
- ・写し終わってもコピー用紙は貼ったままにしておく。作品が完成するまではがさない。

#### ② 一番暗いところをコンテで真っ黒に塗る。〔1～2時間〕

- ・いよいよ塗りに入る。まずは明暗を大まかに塗り分け全体の雰囲気を出すことを目指す。
- ・暗いところから塗っていく。コンテは鉛筆と違って一気に黒くできることが利点。グイグイ塗っていくと「描いている」実感がわいてくる。この感覚は鉛筆では味わえない。
- ・細かいところはコンテ鉛筆を使ってもよいが、あまり使いすぎるとただの“細かい塗り絵”みたいになってしまう。多少のはみ出しは気にせずのびのび描いた方が楽しいと話す。
- ・塗り終わったら指（普通は人差し指）でよくこすってコンテを紙に馴染ませる。ピロードのようなしっとりやわらかい色合いが出てくる。ただし、調子に乗ってこすりすぎるとコンテの粉が完全に紙に食い込み修正や細かい描写ができなくなる。何事も程合いが大事である。この作業でスーパーチャコペーパーの線はかなり消えてしまうが筆圧でくぼんだ線がかすかに見えるはず。それが今後の制作の手がかりとなる。この段階で生徒の手はコンテまみれである。ほっぺや鼻に汚れをつける生徒もいてそれもまた楽しい。

③ 中くらいの明るさの部分をコンテ（やコンテ鉛筆）で塗っていく。〔1時間〕

- ・暗いところに比べて筆圧を弱めにして塗っていく。コンテよりコンテ鉛筆の方が軽く重ねられて中間のトーンを出しやすい。
- ・ひととおり塗れたら暗いところとの境目を濃くしてぼかしたり明暗の変化を描き進めていく。
- ・暗いところと同じように指でこすってしっとりさせるとさせる。ただし闇雲にこするのではなく、顔の丸みを指で撫でていくよう意識させると立体感が出てくる。

④ 中くらいのところから明るいところにかけては鉛筆を使って描いていく。〔1～2時間〕

- ・丸みや立体感を出すように鉛筆の方向を工夫させる。
- ・コンテを塗った中くらいのところにも鉛筆を重ねて移り変わりが自然になるようにする。
- ・指の押さえはコンテの時より控えめにする。また、指が汚いと絵が汚れるので注意させる。
- ・中間から明部にかけての微妙なトーンはやはり鉛筆の独壇場だ。コンテだと黒が強すぎて微妙な変化が難しい。鉛筆ならグイグイ描いてもコンテ以上に濃くはならない。暗部はコンテ、明部は鉛筆という使い分けは完成してみると違和感は少ない。

⑤ ここまでの制作の途中で“ペラ見”について説明。頻繁に“ペラ見”しながら描きすすめる

- ・適当な言葉がなかったので“ペラ見”と名付けたが、コピーをペラペラ高速でめくって形や明暗の調子の狂っているところを見つけること。“漠然と見ている状態”から“観察すること”に進ませる第一歩。
- ・残像を利用していること、残像を長く目に焼き付けられれば正確に描けるようになること、昔の画家はモデルと画架を別の部屋に置いて絵を描く修業したことなどを話して興味を持たせた。
- ・“ペラ見”して全体の雰囲気が出たら次の段階に入る。次は細部の描写である。

⑥ “達人シート”を使って細部を描きすすめる〔4時間〕

- ・またまた大仰なネーミングで恐縮だが、ケント紙に直径5センチほどの丸い窓を開けただけのシート。一人につき2枚用意し、1枚は（ボードに貼らなかつた）写真コピーの上に、もう一枚は絵の同じ位置に置き、開いた窓の部分がそっくりになるよう描いていく。範囲を限定することで観察を徹底させるのが“達人シート”のねらいである。
- ・最初は目からスタートするのがわかりやすい。白目の中の明暗、目の下のたるみ、目頭、黒目の中の色、まつ毛のひとつひとつなど観察する場所に事欠かないからだ。片方の目につき20～30分くらいは描かせる。十分に描き込ませたあと“達人シート”を外すとその部分だけピンと合ったように仕上がっていてなかなか感動的だ。
- ・目が終わったら同様に口、鼻、耳、眉毛、ひげなどと描きすすめていく。
- ・「細かく見る」ことが説明だけではわからない生徒に対しては、実際に手を入れながら観察のポイントを説明する。写真を無視して細かく描いてしまう生徒に対しても同じように個別指導をする。

⑦ “達人シート”と“ペラ見”を繰り返して完成度を上げていく〔2時間〕

⑧ フィクサチーフをかける

⑨ 作品をクリアホルダーに入れて提出する（表面保護のため）

4. 最後に

この題材は、絵に臨む時の抵抗感をなくし、観察することや描写する楽しさを味わわせるのにはそれなりの効果があると思う。芸能人の写真などではなく生徒自身や友人をモデルにできればもっとよいかも。また、自力で形をとるところから描かせる授業もどこかで必要だ。まだまだ工夫や発展の余地がある題材だと感じている。



達人シートを使う（左が写真、右が絵）